

詩人の運命

潘岳——白首まで帰する所を同じうせん

六朝は美の時代である。文章はむろんのこと、顔立ちや振る舞いの美しさも大いに尊ばれた時代である。西晋の詩人潘岳（字は安仁）は、修辭を凝らした文章の美しさでも当代随一、その上、弾き弓を携えて洛陽の街に繰り出せば、婦人たちからたくさんのフルーツを投げこまれて車がいっぱいになったほどの美男であった。そして容貌の美しさは、女性の人気を博すただけに役立つたのではない。この時代の官吏登用においては、美貌もまた出世のための大切な要件の一つであった。「三都賦」の作者として名高い左思は、フルーツの代わりに石を投げつけられたという——いささか胸の痛む——エピソードが伝えられるほどの醜男だったが、彼がなかなか世に認められなかつたのも、それと無関係ではない。中身が素晴らしければ、当然外見にその美があらわれるはず、という六朝期に典型的な観念は、文章についても容貌についても通底していた。ふた